2013mail From AUSTRALIA

オーストラリア発

「社会的蓄え」たっぷりの黄金の国ジパング

柳沢 有紀夫

オーストラリア人の旅行先として日本はとても人気がある。訪問した人のほとんどが古都の佇まいや商都のにぎわいなどとともに感心するのが、数々のハイテク技術。たとえば「トイレからお湯が出てお尻を洗ってくれる」とか「自動販売機やATMが音声でお礼を言う」とか。ただ、「センサーで人を感知して自動的に上がる便座の蓋」に関しては、「心霊現象かと思って、パンツを脱ぐ前に漏らしそうになった」という声もよく聞かれる。

「電車が5分とか10分に一度来る」も驚きの種だ。私が住むブリスベンは衛星都市も合わせた人口が約200万人のオーストラリア第3の都市。わが家は街の中心地点から直線距離で8キロしか離れていないが、それでもラッシュアワーを過ぎると電車は30分に1本となる。さらに郊外に行くと、1時間に1本となる。「新幹線に乗る」ことを旅の目的のひとつにしている人も多いが、「速さは知っていたけど、あんなに立て続けに来るとは思っていなかった」という声も頻繁に聞く。国土が広いせいもあるが、オーストラリアで長距離列車というと、1日2本とか週に2本という、実用性よりも観光を目的としたものがほとんどだからだ。

一般家庭に泊まった経験のある人は、「シャワーのお湯は出し放題」というのにも驚く。というのは、ブリスベンのほとんどの家では家族が入れ代わり立ち代わりで20分も立て続けにシャワーを浴びると、水しか出なくなるからだ。都市ガスが来ている家庭はほとんどなく、電力

で沸かしたお湯をタンクに貯めるのだが、その容量が限られているのだ。

もうひとつインフラの話題を書くと、ブリスベンの中心地から車で40～50分走ると、上水道がない地域も多い。屋根に降った雨水を巨大なタンクに貯めてろ過して使用。雨不足で残量がわずかになると、タンクローリー車のようなものに来てもらい、水を買うのだ。まるで吉幾三さんの歌『俺ら東京さ行ぐだ』に近い世界。またはドラマ『北の国から』の黒板家か。

こう書くと、「オーストラリアってどれだけ遅れた国だ」と思われるかもしれないが、じつは2011年の国民1人あたりのGDPはなんと6万6371米ドルで世界5位。日本の1・45倍となっている。

別の見方をすると、日本の国民1人あたりのGDPは数年前と比べてガクッと順位を下げて世界17位の、4万5870米ドル。これをもって、「日本はダメだ」と悲観的になる人が多いというかほとんどだと思うが、なんのなんの。今まで例を挙げてきたように、オーストラリアなんぞがうらやむような技術やインフラといった「社会的蓄え」がたっぷりある。

今、調子を落としているが、すでに「豊かな国」、「黄金の国ジパング」なのだ。今後も努力は必要だが、必要以上にパニックを起こすことはない。日本人のいちばん反省すべきところは、なんでもかんでも反省してしまう点だ。

もちろんお金がなければ、バブル期がそうであったように「消費を愉しむ」ことはできないかもしれない。でもこれからは今ある「社会的蓄え」を生かしながら、消費ではなく、「人生を愉しむ」とか「本当にやりたいことを愉しむ」時代だと思う。

私はもうアラフィフだというのに、アマチュアサッカーチームに属して5ヵ月ほどの間は毎週金曜日の夜に約20試合、公式戦を戦っている。チームの練習日や草サッカーを合わせると、たぶん70～80日ほど、ボールと仲間と戯れている（歳のせいか、足がもつれてときどき芝生とも戯れているが）。試合が終われば、「反省会」という名目で、星空の下でビールを一杯！

決して「リッチ」ではないが、豊かな時間。日本もそういった方向にシフトする素敵な時期に来た気がする。

柳沢 有紀夫（やなぎさわ・ゆきお）
文筆家、「海外書き人クラブ」お世話係。オーストラリア・ブリスベン在住。1964年生まれ。慶応義塾大学文学部卒業。外資系広告代理店で12年間コピーライターとして勤務後、99年にオーストラリアへ移住。主な著書は、『値段から世界が見える！ 日本よりこんなに安い国、高い国』（朝日新聞出版）、『子育てに必要なことはすべてアニメのパパに教わった』、『日本語でどづぞ』、『困った地球人』（共に中経出版）など。